

氏名(国籍)	サイモン ^{まさか} 眞坂 ダウンズ (イギリス)
学位の種類	博士(心理学)
学位記番号	博甲第2755号
学位授与年月日	平成14年3月25日
学位授与の要件	学位規則第4条第1項該当
審査研究科	心理学研究科
学位論文題目	Psychological Factor within the Language Immersion Program (イマージョン教育における心理学的な要因)
主査	筑波大学教授 教育学博士 新井 邦二郎
副査	筑波大学教授 教育学博士 桜井 茂 男
副査	筑波大学助教授 P h . D . 金 沢 吉 展
副査	筑波大学助教授 博士(教育学) 熊 谷 恵 子

論文の内容の要旨

(1) 論文の目的

本研究ではイマージョン教育の背景にある心理学的要因についての検討をおこなっている。イマージョン方式のバイリンガル教育は1967年にカナダで始まってすでに40年を経ているが、その形はほとんど原型のままである。イマージョンの際立った特色は、大半の(50%以上)通常カリキュラムは外国語を使用して教授されることである。このイマージョン教育では第2言語を教育の目的として使うのではなく、手段として使う。本研究では、2つの異なった民族学的・言語学的文脈におけるイマージョン教育の検討をおこなった。すなわち日本における英語イマージョン教育と米国における日本語イマージョン教育である。この2つのイマージョン教育への調査を通して、以下の3点について検討した。

- ①イマージョン教育と文化的アイデンティティーとの関係について
- ②イマージョン教育と学業成績との関係について
- ③イマージョン教育の成功を促進する要因

(2) 論文の概要

本研究の調査の対象となった児童・生徒の人数は、日本では509名、米国では約680名である。

Part 1：理論的な背景・研究課題

1, 2章では、本研究の目的とイマージョン教育の概要について述べる。概要では、主にイマージョン教育の特徴やその種類についての説明をしている。

Part 2：文化的アイデンティティーとの関係

3章では、本研究の第1の課題である、「英語イマージョン教育は日本の児童・生徒の文化的アイデンティティーにどのような影響を及ぼすか」についての検討を行っている。まず文化的アイデンティティーの先行研究を紹介し、定義を示している。本研究では、文化的アイデンティティーを測定するための、日本・西洋への主観

的態度を測る新たな尺度（Attitude towards Japan and the West Questionnaire：AJWQ）を作成し、信頼性・妥当性の検討を行っている。そしてこの新たに作成された尺度（AJWQ）を用いて、英語イマージョン教育を受けている児童・生徒と普通のプログラムで教育を受けている児童・生徒の文化的アイデンティティーについての比較を行っている。

日本で初めての英語イマージョン教育を行っている加藤学園で教育を受けさせている親にとって、この問題についての関心は高い。加藤学園では普通教育とイマージョン教育の両方を行っているが、どちらの教育を受けさせるかについて親が悩むときに、日本人としての文化的アイデンティティーの問題はイマージョン教育への不安要素となっている。

本研究では、研究上の制約のために、厳密には統制された群での比較が不可能であった。そこで本研究の結果を一般化できるかどうかについては慎重を要する。しかしながら、本研究の結果から、日本における英語イマージョン教育は日本人としての文化的アイデンティティーにポジティブな影響を与えていることが示された。またこれはイマージョン教育の成功とも関連する問題であると示唆される。

Part 3：学業成績との関係

4章では、第2の研究課題である「日本における英語イマージョン教育と米国における日本語イマージョン教育は学業成績にどのような影響を及ぼすのか」について検討する。ここでは、イマージョン教育の成功に関連する変数として、学業成績をとりあげている。学業成績は、米国においては母国語の能力を含めた標準化されたテストで検討されている。英語・日本語イマージョン教育を受けている児童・生徒の学業成績を検討したところ、イマージョン教育は学業成績にポジティブな影響を与えていることが示された。

Part 4：イマージョン教育の成功を促進する要因

5章では、第3の研究課題である「イマージョン教育を受けている児童・生徒の中で、成功若しくは失敗の原因となる要因は何か」ということについて検討している。イマージョン教育の成功や失敗に関係していると思われる要因としては、第2言語習得における先行研究を参考にして、児童・生徒や親の言語学習に対する態度や動機づけなどいくつかの変数を選んだ。

この研究では、イマージョン教育を受けている児童・生徒やその親の言語学習への態度、動機づけと学業成績や第2言語の能力（自己評価）との関係についての検討を行った。その結果、先行研究同様、児童、生徒や親の言語学習に対する態度や動機づけなどの心理学的要因が、イマージョン教育と関係していることが示された。

(3) まとめ

本研究の結果より、以下の3点示されたといえよう。第1に、日本で懸念されていた「イマージョン教育が文化的アイデンティティーに与えるネガティブな影響」というものは示されず、むしろ文化的なアイデンティティーの意識が高まり、ポジティブな影響が示された。また第2に両国において、イマージョン教育は、学業成績にネガティブな影響ではなく、むしろポジティブな影響をあたえていることが示された。また第3に、イマージョン教育を受けている児童・生徒の中でも、成功に関係していると思われる要因を調査したところ、両親や生徒の言語学習への態度や動機づけなどが、成功と関係していることが示された。

本研究では、研究上の制約が多く、完全には検討しきれない部分があった。しかしながら日本語と英語という2つの類似性の低い組み合わせの言語におけるイマージョン教育においても、イマージョン教育は、児童・生徒の文化的アイデンティティーにも、学業成績にもポジティブな影響を与えていることが示された。またイマージョン教育が成功するために重要であると思われる児童・生徒や親の言語学習に対する態度や動機づけなどの心理学的要因がイマージョン教育の成功と関係しているということが示唆された。類似性の高い言語における先行研究

と同様に、日本語と英語という類似性の低い言語のイメージ教育の検討を行った本研究でも、両親や生徒の言語学習への態度や動機づけというものがイメージ教育の成功と関係していることが示された。

審 査 の 結 果 の 要 旨

イメージ教育というわが国ではまだ未開発の教育方法について、心理学的な立場から日本及びアメリカのイメージ教育の実際の現場で調査を行い、イメージ教育が文化的アイデンティティや学業成績にマイナスの影響を及ぼさないばかりか、プラスの効果さえ確認できること、ならびにイメージ教育を効果的にする要因を発見したことは、大きな成果であると言える。特に日本語と英語という類似性の低い言語でのイメージ教育において上記のような知見は、イメージ教育の本質的理解の上だけでなく、今後わが国でイメージ教育を実践・普及していく上においても有益な示唆を与えらるゝと考えられる。

よって、著者は博士（心理学）の学位を受けるに十分な資格を有するものと認める。